琉球大学学術リポジトリ

陶淵明における虚構のありかた(1)　ー「五柳先生伝」を中心にしてー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-01-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 上里, 賢一, Uezato, Kenichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15032

陶淵明における虚構のあり方 (1)

――「五柳先生伝」を中心にして――

上里賢一

一

中国の文学史を見ると、文学というものについての把え方が、中国以外の他の地域におけるそれとは異質の把え方をしていることに気づく。フイクションによる文学の創造が、この国においては長く否定され、拒絶されてきたという事実は、その一つの例だろう。西洋や日本において、フイクションによる文学が文学史の中で大きな潮流として脈うち今日に至っているのに対して、中国においては虚構による文学は長いこと文学史の片すみに押しやられてきた。〈小説〉という呼称は、大事な話つまり歴史や政治等と関係のあるものではなく、どうでもよいつまらない話というのが本来の呼び方であったという。したがって〈小説〉においてさえも、事実かあるいは事実と仮定すべきものに興味の中心が限られ、空想や架空を事実と区別することには、あまり関心がいっていない。

散文におけるこのような事情は、詩の世界にも反映していて、空想や架空の世界に飛翔することを好まない。吉川幸次郎によれば、「詩はもっぱら実在の経験を素材とする言語であるのを、本来とする。詩はもっぱら抒情詩であって、詩人自身の個人的な経験、ことに日常生活のそれにおけるそれ、あるいは人間の日常をめぐる自然をふくめてのそれ、それらを素材とする抒情詩が主流である。…（中略）…要するに、詩も散文も、積極的に虚構を要し

ない。」（「一つの中国文学」）というのが、中国における文学のあり方の大きな特徴である。

陶淵明も、このような中国の伝統的あり方から自由でありえたわけではない。彼の作品も、自己の日常生活をその作品の主要なテーマとしているものが多い。彼は四一歳の時に官史の世界ときっぱりと絶縁すると、以後は郷里の田園において農耕生活をして人生を送るのだが、作品の大半はこの時期の生活に則して、自己の農作業の経験や田園における隣人との語らい、田園から見る現実社会に関しての感慨等を歌ったものである。彼が「生活詩人」とか「田園詩人」とかいわれるゆえんがそこにある。〈注1〉

ところが、その淵明に「桃花源記」や「五柳先生伝」「自祭文」「挽歌」（三首）「形・影・神」（三首）「閑情賦」等虚構の世界と深いかかわりを持つ作品群がある。これらの作品がいずれも陶淵明の作品中でもわりあい人々によく知られた淵明の代表的作品となっていたり、古くから真意が何処にあるのかつかみかねるような難解な問題を内包する作品だったり、数のうえでも無視できないものであることからして、これらの作品の持つ意味は大きいと言える。

陶淵明のフィクションと関係のあるこれらの作品を読んでいくと、その代表的なものの大半がいずれも散文あるいは散文的なもので、詩の場合でも、「挽歌」（三首）「形・影・神」（三首）「読山海経」（十三首）のように連作のものがほとんどあることに気がつく。一首だけのものは、「止酒」や「飲酒」其十三「述酒」のように、明確に虚構とは断定できないが、一海知義のことばによれば「仮託の詩」とか、「仮設の構築という作業として、虚構の世界の現出をこのむ精神とはつながるであろう。」もの、あるいは「比喩や隠喩の領域をこえて、虚構の世界へふみ入っているのかも知れない。」ものと言えるものである。〈注2〉こうしてみると、虚構の世界への関心の拡がりということが、詩の散文性への傾斜と関係しているといえそうである。

虚構による作品といわれるものを並べてみると、いずれも関連する題材を扱った作品を伴っている。例えば、①「桃花源記」に対する「帰園田居」（其一）・「勧農」、②「閑情賦」に対する「雑詩」（其十）、③「自祭文」に対する「挽歌」（三首）、④「五柳先生伝」に対する「命子」・「与子儼等疏」等である。こうしてみると、それぞれのグループは、①・②のような空想的・ロマン的な題材を扱ったもの、③のように自己の死を扱ったもの、④のように自伝的な内容をもつもの、の三つに大別することができる。このことは、淵明の虚構の世界によせる関心の広さを物語るものといえようし、類別したそれぞれの場合における虚構の姿を総合してはじめて、淵明における虚構の特色とその意味をはっきりさせることができると言えるであろう。

この小論は、以上のような問題意識のもとに、淵明の虚構の世界によせる関心の深さとひろがり、その特色、および虚構を導入したことの文学史的な意味を追究しようとする試みの一つである。

①淵明についてはさまざまの呼び名が与えられている。「隠逸詩人」・「田園詩人」・「現実詩人」・「生活詩人」とかである。このうち、「生活詩人」という点については、斯波六郎が『陶淵明詩訳注』において次のように述べている。「陶淵明は、その生涯の殆ど全部を民間人として過した詩人であり、その作は自己の生活から次次とにじみ出た心の叫びである」と淵明の文学の作品を特徴づけている。

②一海知義「陶淵明における〈虚構〉と現実」（『吉川博士退休記念中国文学論集』筑摩書房所収）参照。

二

ここにとりあげた「五柳先生伝」は、古くから陶淵明の自伝といわれ、実録といわれてきたもので、今日でも、自伝的実録か虚構を含んだものかで意見が分かれている。従来の説を整理すると、問題点は次の二点になりそう

だ。①実録か虚構か。②自伝か理想像か。もちろん、①と②はまたそれぞれに入りくんでいる。たとえば、「実録―自伝」・「実録―理想像」・「自伝―虚構」・「虚構―理想像」という様に単純ではない。これについての答えは、「五柳先生伝」の冒頭の文句はもちろん、この短い散文の内容そのものに注目して、何よりもそれが、如何なる状況の下でどのような意図で作られたかを吟味することが大切だと思われる。

まず、その作品についてみてみよう。

先生不知何許人也　　先生は何許の人なるかを知らず、
亦不詳其姓字。　　また其の姓字を詳かにせず。
宅辺有五柳樹　　宅辺に五柳樹あり、
因以為号焉。　　因りて以て号となす。
閑靖少言、　　閑靖にして言少なく、
不慕栄利。　　栄利を慕わず。
好読書、　　読書を好めども、
不求甚解。　　甚だしくは解することを求めず。
毎有会意、　　意に会うことあるごとに、
便欣然忘食。　　便ち欣然として食を忘る。
性嗜酒、　　性、酒を嗜めども、
家貧不能常得。　　家貧しくて常には得る能わず。
親旧知其如此、　　親旧、その此の如くなるを知り、

或置酒而招之。
造飲輒尽、
期在必醉。
既醉而退、
曾不吝情去留。
環堵蕭然、
不蔽風日。
短褐穿結、
簞瓢屢空、
晏如也。
常著文章自娯、
頗示己志、
忘懐得失、
以此自終。
賛曰、
黔婁有言、
不戚戚於貧賤、
不汲汲於富貴。

或は酒を置いて之を招く。
造れ飲みて輒尽くし、
期するところは必ず醉うに在り。
既に醉えば退き、
会て情を去留に吝かにせず。
環堵は蕭然として、
風日を蔽わず。
短褐は穿結し、
簞瓢は屢しば空しきも、
晏如たり。
常に文章を著わして自ら娯しみ、
頗か己が志を示し、
得失を懐うことを忘れ、
此を以て自ら終う。
賛に曰く、
黔婁言える有り、
貧賤に戚戚たらず、
富貴に汲汲たらず。

極其言、　　其の言を極むるに、
茲若人之儔乎。　　かくのごとき人の儔(とも)か。
酣觴賦詩、　　酣觴して詩を賦し、
以楽其志。　　以て其の志を楽しむ。
無懐氏之民歟、　　無懐氏の民か、
葛天氏之民歟。　　葛天氏の民か。

本文と賛を合わせて一七〇字という短篇は、「先生は何許の人(いずこ)なるかを知らず、また其の姓字を詳(つまびら)かにせず。」という書き出しのことばによって始まり、以下に述べられる内容が特定の個人の事跡でありながら、筆者自身に関するものではないとやんわりはぐらかしている。「五柳先生」というのは、どこの土地の何という名の人物なのかわからないけれども、賛に言うように、「貧賤にくよくよせず、富貴にあくせくしないばかりか、酒に酔っては詩を賦し、その心を楽しませるというふうで、まこと太古の民のごとく、純真素朴な自由人とでもいうべき人物である」というのである。ここには、作者である陶淵明自身のかく生きたいとする生活と理想とする人物像が描かれているとみられるわけで、これらをすべて彼自身のいつわりなき真実の姿の吐露と見ることはできない。このことについては後でまた論ずるであろう。

「五柳先生伝」を淵明の実生活のいつわりない記録であるとみなす考え方は、沈約（四四一～五一三）にはじまるといわれる。沈約による『宋書』九十二（伝巻第五十三）の「隠逸伝」の記事を見ると、「陶潛、字ハ淵明。或ハ云ウ淵明、字ハ元亮。尋陽柴桑ノ人ナリ。曾祖侃ハ晋ノ大司馬ナリ。潛、少クシテ高趣アリ。嘗テ五柳先生伝ヲ著ハシ、以テ自ラ況シテ曰ク」とあって、「五柳先生伝」の全文を引いた後、「其ノ自ラ序スルコト此ノ如シ。時ノ人

之ヲ実録ト謂フ」とある。以後、蕭統（五〇一～五三一）の『陶淵明伝』には「嘗テ五柳先生伝ヲ著ハシ、以テ自ラ況ス。時ノ人之ヲ実録ト謂フ。」とあって、「五柳先生伝」の本文は省いてある。『晋書』隠逸伝、『南史』隠逸伝、『蓮社高賢伝』は、いずれも『宋書』と全く同じ記事を載せており、『晋略』の彙伝七は「五柳先生伝を著はし、自ら生平を述ぶ。時の人以て実録と為す」と、蕭統の伝とほぼ同様の記録をしている。表現に多少の違いはあれ、蕭統以下すべて『宗書』の記事を踏襲していることになる。

こうした正史や各種の伝記における記録をうけて、後世の研究者も多くこれを実録としている。例えば、清の林雲銘や呉楚材等がそうであり、日本においても同様の事情がつい最近まで続いてきたし、今でも一部にある。

陶淵明が、空想上の人物に託する形をとって形象した「五柳先生」なる人物の伝記が、時の人々には淵明自身の実録あるいは自伝であると受け取られ、以後長くそのように信じられてきた理由はどこにあるのだろうか。「五柳先生」は、どのようにして淵明自身と結びついたのだろうか。

岡村繁は『宗書』以後蘇東坡に至る間に、「高潔な隠逸詩人―陶淵明」なるイメージがかたちづくられて定着していった過程を詳細に分析した結果、次のように指摘している。

古来の陶淵明像より一応離れて、われわれが、自分自身の目で、改めて百数十篇に及ぶ彼の詩文を読みなおしてみる時、そこから直接感じ取られる淵明への印象は、必ずしも従来の高い評価と合致しないものが多々ある。（……中略）…

淵明の作品の多くから読み取れる、このような彼の心理の不安定さや暗欝さは、彼の人柄や文学の特質を考察しようとするばあいに、決して見逃すことのできない重要な側面であるはずである。にもかかわらず、古来多くの淵明を語る人びとがこうしたいわば煩悩に苦しむ彼の人間らしい側面には一切目をつぶって、もっぱら

人生を達観し世俗を超越した孤高の隠者としてのみ彼を性格づけてしまったのは、いったいどうしたわけなのであろうか。……（中略）…

結論から先にいえば、これら『宗書』以下の諸伝記が、もっぱら淵明をこのような高潔無欲な隠者として性格づけざるを得ない強い規制力が、伝記の作者に対して働いていたことにある、と私は考える。〈注1〉

「五柳先生」なる人物の性格や生き方、その趣味などを見ると、かって吉川幸次郎をして、「矛盾の中にこそ、淵明の文学の高貴さがあるのではないか。」〈注2〉といわせた、淵明の文学に著しい、複雑に揺れ動く内面的矛盾の影はまるで見出せない。

「五柳先生伝」の内容の要点は、「閑靖にして言少なく、栄利を慕わず。読書を好めども、甚だしくは解することを求めず。……性、酒を嗜めども、家貧しくて常には得る能わず。……期するところは必ず酔うにあり。簞瓢は屢しば空しきも、晏如たり。常に文章を著はして自ら娯しみ、頗か己が志を示し、得失を懐うことを忘れ、此を以て自ら終う。」ということになろう。ここには、たしかに「高潔無欲な隠者」の風貌しかないし、全てを超越した自然人としての姿しかない。ここに描かれた人物像は、陶淵明の生活の一面とつながるところもあるだろうが、その全体像ではないことは岡村氏の指摘するとおりである。

① 岡村繁『陶淵明―世俗と超俗』NHKブックス三二～三三ページ参照。

② 吉川幸次郎『陶淵明伝』新潮文庫　三五ページ。

三

『宗書』以来「五柳先生伝」を淵明の実録と見なしてきたことに対して、さまざまの異論が唱えられてきている

のも事実である。清の張廷玉は「余二十歳ノ時、陶淵明ノ〈五柳先生伝〉ヲ読ミ、ヲモヘラクハ、此レハ後人ノ代作ナリ、先生ノ手筆ニ非ザルナリ。蓋シ篇中ノ〈栄利ヲ慕ハズ〉、〈得失ヲ懐フコトヲ忘レ〉、〈貧賤ニ戚戚タラズ、富貴ニ汲汲タラズ〉ノ諸語、大イニ痕跡アリ、恐ラクハ天懐曠達ナル者ハ此等ノ語ヲナサザルナリ。此レ少年ノ狂肆ノ談トハ雖ドモ、今ニ迄モ之ヲ思フ、亦タ未ダ必ズシモ全テ非ナラザランヤ」〈注1〉と述べて、陶淵明自身の作であることさえ否定している。しかし、この内容をよく読んでみると、淵明を「高潔無欲な隠者」と見る点では伝統的淵明観の枠の中にあることに変わりはない。かえって、この伝統的淵明観に深くとらわれていることによって、「高潔無欲な隠者」である陶淵明がこのような悟り足りない言辞を吐くはずがないとして、淵明の自作にあらずとしているのであって、淵明偶像化もきわまったというべきであろう。

張廷玉のような議論は論外として、「五柳先生伝」をそのまゝ淵明の実録・自伝とする見方に対して強弱の差はあれ異論を提示しているものについて、見ておく必要がある。

まず、自伝であることを認めつつ、条件をつけている見方として、吉川幸次郎と狩野直喜の説がある。吉川は次のように言っている。

陶淵明の伝記は、宗書の隠逸伝、晋書の隠逸伝、南史の隠逸伝など、彼の死後百年または二百年にして編集された史書に見える。また梁の武帝の皇太子、昭明太子蕭統が、やはり五世紀のはじめに書いた陶淵明集の序は、彼の文字をたたえる文字として、最も早いものの一つである。

しかし、それらのすべてよりも、もっとも早く書かれた伝記は、淵明自身の筆になる自伝、「五柳先生伝」であるとしなければならない。〈注2〉

吉川はこのように述べて、「五柳先生伝」の本文を紹介した後で、この散文の冒頭の文句である〈先生は何許の

人なるかを知らず〉というのは、「いうまでもなく、わざととぼけた言葉である。」と述べている。「わざととぼけた言葉である。」ということの真意はわからないが、自伝であることを認めている点は、前の引用から明らかである。

狩野直喜の指摘するところは、吉川のこの見方に近いと思われるが、吉川より説明は明瞭である。

「五柳先生伝」は、自分の事柄を、自分で書いたのであるが、客観的に自己批評をやって居る。……（中略）……而して「先生不知何許人、亦不詳其姓字」と客観的に描写したる所に、妙味は存するなり。一体、此人は自己の伝を書いたるのみならず、其死するに至り、「自祭文」を書いて居る。……（中略）……五柳先生伝でも、自祭文でも、自分を自分で批評し、而して、それが深刻でなく、ふはりと軽く、自己をあざけるやうな、又自分を傷むやうな態度を取って居る。前に挙げたる「責子詩」の如きも、亦彼のHumourと見るべきものと思ふ。淵明の中には隠者があった。又或意味に於いては厭世家があった。又詩中にも、随分悲痛なる情緒が多いが、同時に、天命を楽み、自然を愛し、困苦死生の場合に於いてもHumourを失はなかった。〈注3〉

いわゆる、実録とは言いつつも、その中にユーモアがあり、自分を客観化し批評する態度が込められているというわけである。この両者は、条件つきで自伝とする立場とみてよかろう。この条件の部分が拡大されると、次第に実録・自伝とみなす側面がせばまっていくわけだが、その例として、岡村繁と一海知義の見方があげられよう。

岡村繁は、「五柳先生伝」の書かれた目的（作品のモチーフ）にふれつつ、次のように述べている。

淵明は、この「五柳先生伝」を作るに当って、彼自身の超俗的な生活面の記述を主軸としつつも、意識的に「五柳先生」を客観化して、できるだけ自由な立場で、その理想とする隠者の風貌を描写しようと意図したもののように思われる。たとえば、彼は明らかに江州の尋陽（今の江西省九江市一帯）の出身であり、れっきと

した姓も字もあったにもかかわらず、この伝記の冒頭から「先生は何許（いずこ）の人なるかを知らざるなり。亦た其の姓をも字をも詳らかにせず」といった隠者風の紹介で書き起こしている説話的な筆致は、すでにこの伝記が、こうした虚構的性格の作品であったことを端的に物語るものである。〈注4〉

この文章から明らかなことは、淵明が「五柳先生伝」を書いた時、彼の生活を主軸としながらも、理想化された隠者の風貌を描くことを目的としたこと。冒頭の文句には虚構的性格を示すものが色濃くあらわれているということである。岡村は、このすぐ前の部分でも、「貧賤や富貴を超越して自由の天空を飛翔する〈五柳先生〉の生き方こそが、紛れもなく淵明の希求してやまない理想の境地であった。」と述べて、この伝記的文章が、単純な実録ではないことを指摘している。

一海知義は、岡村と同様にこの散文のもつ「虚構への傾斜」に注目しつつ、注意深く次のように述べている。

五柳先生伝が「虚構」であるがどうかについては、当時も意見がわかれたであろう。そして現在でも議論はわかれるかも知れぬ。たしかに五柳先生伝は、淵明の虚構への興味だけが生んだものではない。そこには、虚構によるかかるのでなく、事実にもとづいた強烈な自己主張がある。……（中略）……冒頭のことばは、胸中に「猛志」をひそめながら低い身分に甘んじなければならなかった淵明の、当時の門閥社会への痛烈な反逆、いわば逆の自己主張としてもよみとれる。それは虚構などというものではないかもしれない。しかし自伝というものが、そもそも虚構への傾斜なしに生まれないだけでなく、この自伝全体のもつとぼけた味わいは、彼の虚構的世界への興味と無縁ではないだろう。〈注5〉

岡村・一海両者の見方は、自伝的側面を完全に否定しているのではないが、その自伝が、淵明の実生活をそのまま写したもの、すなわち実録と見る意見とは異なったものになっている。自伝的な散文だが、それは「淵明の希求

してやまない理想の境地」を描いた「虚構的性格の作品」であり、「事実に則した強烈な自己主張」はよみとれるものの、「虚構への傾斜なしには生まれない」ものだし、「虚構の世界への興味と無縁ではないだろう。」というのである。この指摘は、「五柳先生伝」を、積極的に虚構の作品とみなしているわけではないが、また単純に実録としているのでもない。事実にもとづきながらも虚構への興味や関心なしには生まれ得ない作品と見ることによって、自伝的実録であると決めてかかる見方を抑制し、この作品のもつ虚構の世界との関係に注目しようとする発言であるとみることができる。

この岡村・一海両者の意見よりもさらに積極的に、この散文を虚構による作品であるとする見方がある。中谷孝雄は、「此の奇妙な小説めいた文章を、淵明の自伝だといってよいのだろうか。」という疑問を提示したあとで次のように述べている。

私の見るところではこれは一種の私小説であり、実録とはいへないやうに思ふ。むろん、当時のシナに私小説などといふものはなかったが、虚構（フイクション）を好むのは老荘家の常であり、荘子などはその尤なる者であった。淵明は前にも言ったやうに老荘家であるよりは寧ろ儒家（儒教の信奉者）であったが、しかしその反面には多分に老荘家的なところがあり、フイクションを好む点でも人後に落ちなかった。……（中略）……五柳先生の人柄やその行蔵には淵明その人と大そうよく似たところがある。ここに書かれてゐることは殆んどすべて、淵明が他の詩文で彼自身に就いて語るところと一致してゐる。だから時人がこの伝を実録とし、後人がこれを自伝としたことも、必ずしも理由のないことではない。しかし私の見るところでは、これはいはば彼自身をモデルとした創作であって、実録でも自伝でもない。なぜなら淵明は、自己の明るい面だけを五柳先生に分ち与へ、暗い面はすべて切り捨ててしまってゐるからである。……（中略）……

要するに『五柳先生伝』は、あるがままの自己を書いた実録や自伝ではなく、かくありたいと希望する自己を描いた一種の創作であった。〈注6〉

この文章で中谷は、実録・自伝というとらえ方を完全に否定して、自己をモデルとした一種の私小説であり、創作であると断定している。これは、吉川・狩野の両者が、自伝あるいは実録と認めながら、たんなる自伝・実録としなかったこと。岡村・一海の両者が、実録というとらえ方と対立しながらも、自伝的側面を認めつつ、そこに淵明の虚構の世界へよせる関心を読みとろうとしているところから、大きく一歩踏み出たものとなっている。

『宗書』以来伝統的な理解となっている「実録・自伝」という見方から、中谷の「虚構・モデル小説」というとらえ方までの間には、単に考え方の相異では片づけられない深い溝が横たわっているように思える。一七〇字にすぎない短い文章についての解釈が、どうしてこうも極端に対立するものになってしまうのだろうか。それは、陶淵明という人物のもつ、はかり難い二面性、両極に分裂して対立・矛盾する思想の在り方等が根本的な原因になっていると考えられる。そして、「五柳先生」像の極端に異なるとらえ方は、そのまゝ陶淵明像の落差の反映になっていると見ることができる。

① 『陶淵明詩文彙評』明倫出版社印行三六六ページ参照。
② 吉川幸次郎『前掲書』四二～四五ページ参照。
③ 狩野直喜『魏晋学術考』筑摩書房　二二五～二二六ページ参照。
④ 岡村繁『前掲書』十一～十二ページ参照。
⑤ 一海知義「前掲論文」一九一～一九二ページ参照。

⑥中谷孝雄『わが陶淵明』筑摩書房一四六〜一四八ページ参照。

四

ところで、陶淵明には自己の生活の実態や、日頃胸に秘めている願望などをうたった、「五柳先生伝」と内容的に深いかかわりを持つと思われる作品がある。「祭従弟敬遠文」・「祭程氏妹文」・「戊申歳六月中過火」・「飲酒」（其十六）・「与子儼等疏」等がそうである。しかも、注目しなければならないことは、「命子」（二〇歳半前？）「始作鎮軍参軍経曲阿作」（三五歳？）の二つの作品のほかは、すべて彼の四〇歳以後の作品であることであり、同時に、陶淵明が彼自身について直接あるいは間接に語っているこれらの詩句が、ほとんどすべて過去の生活を回想したものになっていることなど、見逃せない問題を含んでいる。〈注1〉

たとえば、彼の四〇歳以後（四〇歳とするものと五十四歳とする説とがある。）の作品と考えられている「飲酒」（其十六）を見てみよう。

少年罕人事　　少年より人事罕（まれ）にして
游好在六経　　游好は六経に在り
行行向不惑　　行き行いて不惑に向（なんなん）とするに
淹留遂無成　　淹留して遂（か）くて成るなし
竟抱固窮節　　竟に固窮の節を抱きて
飢寒飽所更　　飢寒　更（へ）し所に飽く
敝廬交悲風　　敝廬　悲風を交じえ

荒草没前庭　荒草　前庭を没す
披褐守長夜　褐を披て長夜を守るに
晨雞不肯鳴　晨鶏は肯えて鳴かず
孟公不在茲　孟公はここにあらず
終以翳吾情　終にもってわが情を翳らす

この詩では、生活のわびしさや精神的孤独が、青少年の頃を回想する中にこめられている。しかも、最初の二句は、彼が少年の頃から人々とのつきあいの中に楽しみを見出すよりも、儒家の古典に親しむ寡黙で読書好きな少年だったことを語っている。これは、「五柳先生伝」の中における「閑靖にして言少なく、栄利を慕はず。読書を好めども、甚だしくは解することを求めず」と述べていることと通ずるものである。ただ、「敝廬　悲風を交じえ、荒草　前庭を没す。褐を披て長夜を守る」という生活は、「五柳先生伝」でいう「環堵は蕭然として、風日を敝はず。短褐は穿結し」という表現と全く同じ様子を写しながら、そこに住む人間の心境には、同一人のことばとは思えないほどの差異がある。「五柳先生」という人物は、そのような状態にあっても、「晏如たり。」であるのに対して、この詩の中では「行き行いて不惑に向とするに　淹留して遂くて成るなし」状態であり、「晨鶏は肯えて鳴かず　孟公はここにあらず　終にもって吾が情を翳らす」と言って、「晏如たる」気持ちなどとはほど遠い心境をもらしている。それは、「戊申歳六月中遇火」においても同じである。「総髪より孤介を抱き　奄ち出ず四十年　形迹は化に憑りて往くも　霊府は長く独り閑なり」というのは、「五柳先生伝」の初めの部分とよく似ているけれども、この詩の場合も、主調は淵明の現実の生活の暗さというものが反映して、その中から少年時代を回想したものとなっている。それは、この詩が火事という不幸に遭遇して、精神的に大きなショックを受けている状況の中で

作られているという背景を考えれば、「五柳先生伝」における場合のように、甘美なイメージがつづれないことはむしろ当然のことと言えるのかもしれない。

しかし、淵明が自己の青少年時代を回想するとき、たんに甘美な面、明るくのびやかな面だけでなく、必ずといって良いほど現実の孤独・さびしさ・不遇感といった、いわば人生の暗い側面を背景としている例は、ここに紹介した二つの作品においてばかりではない。「有会而作」・「始作鎮軍参軍経曲阿作」・「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」・「与子儼等疏」等の、彼の青少年時代を回想している作品の全てが、見方によってはそうであると言える。その中から「五柳先生伝」の中のイメージとよく似た詩句を含む作品を紹介しよう。

弱齢寄事外　　弱齢より事外に寄せ
委懐在琴書　　懐を委ねるは琴と書に在り
被褐欣自得　　褐を被て欣んで自得し
屢空常晏如　　屢しば空しきも常に晏如たり
時来苟冥会　　時来たりて苟しくも冥会せば
宛轡憩通衢　　轡(まが)を宛げて通衢に憩う
投策命晨装　　策(つえ)を投げて晨装を命じ
暫与園田疎　　暫く園田と疎なり
眇眇孤舟逝　　眇眇として孤舟逝けば
緜緜帰思紆　　綿綿として帰思紆(まつわ)る
我行豈不遙　　我が行　豈に遙かならざらんや

登降千里余　　登り降りること千里余
目倦川途異　　目は川途の異なるに倦み
心念山沢居　　心は山沢の居を念う
望雲慙高鳥　　雲を望んでは高鳥に慙じ
臨水愧游魚　　水に臨んでは游魚に愧ず
真想初在襟　　真想は初めより襟に在り
誰謂形迹拘　　誰か謂う形迹は拘せらると
聊且憑化遷　　聊か且つ化の遷るに憑りて
終反班生廬　　終には班生の廬に反らん

（「始作鎮軍参軍経曲阿作」）

この詩は、陶淵明が鎮軍将軍（劉牢之の幕僚）に就任して早々、曲阿を通過した時の作とする説が多い。この説に従えば、淵明三五歳（三九九）の年ということになる。この詩の冒頭四句は、「五柳先生伝」の中にある句とほとんど変わらない。ただ、「弱齢より事外に寄せ　懐いを委ねるは琴と書に在り　褐を被て欣んで自得し　屢しば空しきも常に晏如たり」という句は、「高鳥」や「游魚」のように拘束されない生活にあこがれながら、現実には「形迹に拘せられる」状態にあることから、これからの自由、つまり自己の意志に忠実で真実なる生活への回帰を希求する心情をうたったものになっており、「五柳先生伝」におけるほど甘く明るい面ばかりではないことに注意すべきであろう。それは、「与子儼等疏」においても同様である。長い文章なので、関連する箇所だけを抄録して

おこう。

吾年過五十　吾が年五十を過ぐ
少而窮苦　少くして窮苦
毎以家弊　毎に家弊を以て
東西游走　東西に游走す
性剛才拙　性は剛にして才は拙
与物多忤　物と忤うこと多し
……（中略）……
少学琴書　少くして琴と書を学び
偶愛閒静　偶たま閒静を愛す
開巻有得　巻を開いて得ること有らば
便欣然忘食　便ち欣然として食を忘る
見樹木交蔭　樹木の蔭を交えるを見
時鳥変声　時の鳥　声変ず
亦復歓然有喜　亦た復た歓然として喜び有り
常言五六月中　常に言う五六月中
北窓下臥　北窓の下に臥し
遇涙風暫至　涙風の暫く至るに遇えば

自謂是羲皇上　　自ら謂えらく是れ羲皇上の人かと。

……（後略）……

ここに抄録した文の後半部分は、「五柳先生伝」のあの何の束縛もなく自由でのびやかな生活を楽しんでいる姿の描写とそのまゝ重なるものである。「自ら謂えらく是れ羲皇上の人かと。」と述べていることからも明らかなように、ここでも彼は伝説時代である上古の素朴な生活に対する深い憧憬を表明している。「五柳先生伝」の賛の部分で「無懷氏の民か　葛天氏の民か」と、太古伝説上の民に自らをたとえたことと、まったく同じ心情をここでも述べているわけである。

このように、陶淵明が自己の青少年期をふりかえって詠んだ詩句には、いつも明と暗の両面がからみ合っている。それは、彼が青少年時代を回想した詩句がほとんど四〇歳代以後につくられたこと、彼の四〇歳代以後が、必ずしも自由でのびやかな明るい生活ではなかったことが理由の一つになっていると考えられる。彼にとっては理想の生活の場であった田園にもどってからも、生活は決して楽ではなかったばかりか、貧しく不自由で孤独であった。その現実生活における不自由さ、暗さというものが背景になって、かつての生活――少年の頃の無邪気で、貧しい中にあっても琴書の世界に遊んでいられた生活――に対するなつかしさや憧れをかきたてたであろう、と考えられる。また、彼が理想の世界として太古の時代をうたい、太古の人々の生活に憧れたのも、現実の生活の暗さや不自由さが、その背景になっていると言えるだろう。

ともあれ、自伝と言われる「五柳先生伝」では、彼が自己の若い頃を回想する時たえずつきまとい、あるいは発想の大きな背景となっている現実の暗い部分は、すべて消し去られており、甘美な側面ばかりがうたわれていることになる。そこに我々は、彼が「五柳先生」なる人物に託して描こうとしたものが何であったかを見ることができ

るように思う。

先にも述べたように、中谷孝雄は「五柳先生伝」について、「自己の明るい面だけを五柳先生に分ち与へ、暗い面はすべて切り捨ててしまって」いるとし、その結果これを自伝や実録ではなく、「彼自身をモデルとした創作」であると断定したわけだが、「五柳先生伝」を創作と断定しない研究者（実録であり自伝であるとみたり、自伝的なものだがフィクションへの傾斜が見られるとする意見など）も、これが、淵明自身の理想の人間像を描いたものであることは認めている。たとえば、大矢根文次郎は、この短篇を実録とする立場にあるが、その創作意図にふれて次のように述べている。

自分が隠逸して一生を自己に忠実に生きたいという希望を写そうとしたものではないか。……（中略）……無懐氏の民か、葛夫氏（ママ）の民か、といわれる人になりたいとの思いを伝える所にこの製作意図があろう。〈注2〉

大矢根のこの説明の中で、「自分が隠逸して一生を自己に忠実に生きたいという希望を写そうとしたものではないか。」という部分には、この作品の成立時期の問題ともかかわって〈注3〉、すぐには賛同できかねるが、後半部分については、そのとおり認めて良いのではないかと思う。ただ、大矢根が実録としながら、「希望を写そうとしたものではないか。」といい、「無懐氏の民か、葛夫氏（ママ）の民か、といわれるような人間になりたいとの思いを伝える」意図でこの伝が作られたとするとき、そこには論理的な矛盾が起こる。理想の人間像を描いたとすれば、現実にかくあり得ていない自己が存在し、その逆説的な価値、つまりかくありたくないとする発想の転換があってはじめて、理想とする自画像を形象化できると思われるからである。理想の自画像や現実にありえていない自己の生活の描写がどうして「実録」になり得ようか。

たしかに、「五柳先生」は、淵明の趣味や他の作品によまれた彼の人がらを思わせる人物と重なる部分を多数も

ち、その高潔な生き方や人格と実際に重なり合う部分を多く含んでいる。しかし、それは自己の一面であって他の側面は切り捨てられており、実録的自伝といわれるものとは、異質のものとみるべきものだと考える。

大矢根は、「実録でありながら描写される自分を自分より引き離し、第三者として自己を凝視し、瑣末な点はこれを切り捨てて人間として最も本質的な点に焦点を合わせ、頂点をのみ捉えて描写している。」〈注4〉と述べているが、切り捨てられている淵明の暗さ、孤独、さびしさ、迷いと言うような側面が「瑣末な点」でないことは明らかだし「五柳先生伝」に描かれていないこれらの切り捨てられた部分にも、「人間として最も本質的な点」が現われていることも多いと思われる。「実録」とみなすところからくる論理の矛盾がこの辺に露呈していると言うべきだろう。

①陶淵明の作品の中で、彼自身が自己の青少年時代を回想して歌っている詩文としては、筆者の見るところでは次のような例がある。Ⅰ　二〇歳以前のことを回想していると思われるものに、「祭従弟敬遠文」・「祭程氏妹文」・「戊申歳六月中遇火」・「飲酒」（其十六）があり、Ⅱ　二〇歳頃およびそれ以後を回想しているものと思われるものに、「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」・「有会而作」・「始作鎮軍参軍経由阿作」・「飲酒」（其十九）があり、Ⅲ　青少年の頃の回想だが何歳頃を回想したものかすぐには決めかねるものに、「与子儼等疏」・「帰園田居」「擬古」（其八）・「雑詩」（其五）・「雑詩」（其七）がある。このことについては、拙論『陶淵明の農耕詩について』（『集刊東洋学』第三十四号）をあわせて参照していただきたい。

②大矢根文次郎『陶淵明研究』早稲田大学出版部、四六三ページ。

③「五柳先生伝」の成立時期については、現在四つの説があるが、ここでは李長之の四二歳説にしたがった。

ちなみに、王瑤は「蕭統伝」の記録をうけて二八歳頃としている。大矢根文次郎は三〇歳頃とみている。これは『宋書』の「州、主簿に召すも就かず。躬ら耕し自ら資し、遂に羸疾を抱く」という記事にもとずいて、これが三〇歳だと考えられ

るところからこのように推論している。林雲銘や呉楚材は、五六歳以後とする。

④ 大矢根文次郎『前掲書』四六三ページ。

五

「五柳先生伝」について、それが淵明自身の生活をそのまゝ写したもの（実録）ではないことは、すでに述べたとおりだが、この散文のもつ自伝的形式についてもう少し述べておく必要があろう。

淵明には、自己の経歴を記したものとして、この「五柳先生伝」よりも、一層自伝に近い形の作品がある。直接には「命子」がそうだし、先にあげた淵明自身が自ら青少年期を回想している詩句が、それを補強するものとしてある。淵明が、自分の正確な実録を伝記の形で残そうと思ったならば、たぶん「五柳先生伝」のような形はとらなかったであろうと思う。それを示唆するものとして「晋の故征西大将軍の長史孟府君の伝」という作品がある。これは淵明の母方の祖父に当る孟嘉の伝記だが、その出身・姓字・経歴・業績・人物像等およそ伝記の備えるべき要素があますところなく、むしろ誇張ではないかと思われるほどの表現をもって描写されている。「五柳先生伝」の書き出しとはまるで違うその書出しの部分だけでも紹介しておこう。

君、諱（おくりな）は嘉、字は万年、江夏の鄂（がく）の人なり。曾祖父の宗は、孝行を以て称せられ、呉に仕えて司馬たり。祖父の楫は、元康中、廬陵の大守と為る。宗、武昌の新陽県に葬らる。子孫、焉（ここ）に家し、遂に県人と為る。

君、少くして父を失い、母を奉じて二弟と居る。大司馬長沙桓公陶侃の第十女を娶（めと）る……

「先生は何許（いずこ）の人なるかを知らざるなり、亦た其の姓字を詳かにせず」という「五柳先生伝」の書出しとの違いは、もはや述べるまでもなかろう。このように詳細な記述をする人物が、自分の「実録」を書こうとする時、何

故先のようなはぐらかしをしたのだろうか。もちろん、自伝の記録の方法には種々の方法があるであろう。しかし「五柳先生伝」には、その名前や出身はもちろんその経歴さえ記していない。あるのは、その内面的趣向に関することが主であり、人物の情緒的な側面ばかりである。それも明るい面だけで、淵明の詩文に特徴的な精神的な葛藤・内面的な分裂の一方の特色が完全に切り捨てられたものになっており、精神史の描写としても不完全なものであるといえよう。

「命子」の中でも、その伝記的記述は詳細である。この作品は、八句で一つのまとまりをなすものが十句も続く四言の格調高い長篇である。その一章から七章までは、はるかなる祖先から淵明までの系譜についてのべており、八章から十章に至る三章で、生まれたばかりの子に命名しその将来を期待する父親の愛情をうたい込んでいる。

このように、祖先の伝記や自己の系譜について詳細な記述を残した人物が、自己の伝記については、人をくったような書き出しで、しかもある理想的な一面ばかりを、それもかくありたいとする願望としてしか描けなかったのは何を意味するのだろう。そこには、淵明が「五柳先生」に託して自己の実録・自伝を残そうとしたとするよりも、ほかに何らかの意図があったと見なければならない。

李長之や一海知義らは、従来の実録・自伝とする見方、および実録の中にもユーモアや自己の生活への願望があるとする見方から一歩進んだところで、この自伝的な形式をもつ短篇の創作意図と特色に迫ろうとしているように見える。

まず、李長之は、この内容について「飲酒」（其十八）と対比しつつ、淵明は政治の圏外に出てはじめて世間から「超然」たる態度を採ることができた。それは「隠士一般の態度で、沈黙ということ」であったと述べたあと、次のように述べている。「しかし、それは真の沈黙であろうか。なぜ、沈黙したのか。本来の原因は、当時の残忍

な政争に対する消極的な抗議にあった。」としている。ここで言う「消極的な抗議」ということに関して、「この頃、彼は態度の表明を極端にきらっていたので、〈時ありて敢えて言わざる〉態度をとったにすぎない。現実に対して超然であるということは、冷淡であるということだし、冷淡であるということは、賛成ではないということだ――そもそも真の超然などというものがあるだろうか。」と述べ、さらに、「五柳先生伝」に描かれている状況が、「飲酒」（某十八）ととても良く似ているということを指摘したうえで、思想と態度の明るいことが、「この自叙伝を生むのにふさわしい時期」だとしている。〈注1〉李長之は、「五柳先生伝」の明るさの背景に、桓玄や劉裕らの政治的抗争の続く現実から退いて、「敢えて言わざる」態度をとったこと、内面的なところでの「超然」に表われているような現実に対する冷淡な態度の反映があると見ている。

一海知義も李長之のこの見方に近いと言えよう。一海は「五柳先生伝」の冒頭のことばにふれて、「胸中に〈猛志〉をひそめながら低い身分に甘んじなければならなかった淵明の、当時の門閥社会への痛烈な反逆、いわば逆の自己主張としてよみとれる。〈注2〉」ものがあると、その背景に社会的な要因を見ようとしている。

こうしてみてくると、「五柳先生伝」の中に、淵明が自己の明るい側面だけを描写して孤独や憂いなど暗い側面はとりあげなかった理由の一つがより明確になってくる。淵明は「五柳先生」という人物の内面的趣向を描く中に彼自身の理想と願望を託したわけであり、そこには「敢えて言わざる」消極的な態度ではあるが、現実の政治の動向に対する批判、あるいは門閥偏重の社会に対する反逆というものがあったとみられる。

「五柳先生伝」が、あるがまゝの現実を描いたものではなく、自伝の形をかりて自己の理想と願望を形象化したものであったことを示すと思われるもう一つの理由として、酒と淵明との関係がある。「淵明といえばすぐに酒を想起する」といわれるほど、淵明は酒を愛し、好んで酒を詩のテーマとしてきた詩人である。淵明の酒の飲みっぷ

りは、その詩が全体にそうであるように平静でおだやかである。しかし、その内面には、ふつふつとたぎる不安と不満、飲めども尽きぬ孤独と焦燥の影が色濃くつきまとっている。

白日淪西阿　白日　西の阿に淪み
素月出東嶺　素月　東の嶺に出づ
遙遙万里輝　遙遙として万里に輝き
蕩蕩空中景　蕩蕩たり空中の景
風来入房戸　風来りて房戸に入り
夜中枕席冷　夜中　枕席冷ゆ
気変悟時易　気変じて時の易るを悟り
不眠知夕永　眠らずして夕の永きを知る
欲言無予和　言わんと欲するも予に和うるものなく
揮杯勧孤影　杯を揮げて孤影に勧む
日月擲人去　日月　人を擲てて去り
有志不獲騁　志あるも騁するを獲ず
念此懐悲悽　此を念いて悲悽を懐き
終暁不能静　暁に終るまで静かなる能わず

（「雑詩」其二）

この詩には、かって「猛志を四海に逸せ　翮を騫げて遠く翥せんと思へり」（「雑詩」其五）に見るような内に

大いなる志を抱きながら、「志あるも騁するを獲ず」、現実の政治社会の場では、若い頃から抱き続けてきた夢を実現しえなかったことに対する失望と挫折感がうたわれている。しかも「杯を揮げて孤影に勧む」という句に見えるように、深い孤独の中でひっそりと飲む姿が何ともいたましく迫ってくる。

彼の内面的苦悩は、この社会的なものに起因するもののほかに、「飢と寒さは更し所に飽く　敝廬に悲風交わる」（「飲酒」其十六）「弱年にして家の乏しきに逢い　老い至って更に長に飢う」（「有会而作」）という詩句に見られるような貧之、さらに死に対する恐れ等、人生のさまざまな面にわたっている。淵明は、こうした人生の悩みをはらうものとして酒を飲んでいる。「酒は能く百の慮いを怯い」（「九日閒居」）、「彼の千載の憂いを忘れん」（「遊斜川」）という詩句には、心の憂いを消し去るものとして酒を位置づけている。

秋菊有佳色　　秋菊　佳色あり
裛露掇其英　　露に裛れたる其の英を掇み
汎此忘憂物　　此の憂を忘れる物に汎かべ
遠我遺世情　　我が世を遺るるの情を遠くす

（「飲酒」其七）

ここにおいて、淵明は酒を「忘憂の物」と呼んで、酒が楽しい時だけのものでなかったことを言っているわけだが、「五柳先生伝」の中には、このような憂いについては何も述べていない。淵明にとって酒は、人生のさまざまな側面と密接にからみあっていたものであったにもかかわらず、五柳先生は生まれつき酒が好きだったというだけである。

李長之が、その詩の内容とよく似ており、「両者は姉妹篇である。〈注3〉」とした「飲酒」（其十八）においても、酒

をかりてうたう淵明の心情は、「五柳先生伝」におけるほど単純ではない。

子雲性嗜酒　　子雲は性　酒を嗜めども
家貧無由得　　家貧しくして得るに由なし
時頼好事人　　時に頼る　好事の人の
載醪祛所惑　　醪を載せきて惑う所を祛う
觴来為之尽　　觴来たれば之が為に尽くす
是諂無不塞　　是れ諂れば塞たされざることなし
有時不肯言　　時ありて肯えて言わざるは
豈不在伐国　　豈に国を伐つことに在らざらんや
仁者用其心　　仁者　其の心を用いなば
何嘗失顕黙　　何ぞ嘗て顕黙を失せん

（「飲酒」其十八）

冒頭の二句は「五柳先生伝」の初めの方にそのまま出てくる句であり、飲み方も同じく平静でおだやかである。しかし、最後の四句には、ただならぬものが感じられる。「仁者は、発言すべき時と沈黙すべき時とをとりちがえることなどない。」というその背後には、現実は「肯えて言はざる」べき時代であるという認識が秘められているわけで、そこには消極的ではあるが、劉裕を頂点とする当時の政治社会のあり方に対する抗議が読みとれる。そして、この詩のもつ内容的な近似性と気分の共通性からして、この詩と「五柳先生伝」とは、ほぼ同じ時期に作られたと推論する李長之の説は説得力がある。

こうしてみてくると、「五柳先生伝」のユーモアを秘めた人をくったような書出しといい、自伝的形式をとりつつ何一つ自己の経歴や事跡について記していないことといい、さらに理想的な明るい側面ばかりを付与したこととといい、この自伝的作品に淵明が盛り込もうとしたものが、自己の実生活の記録やいつわりない自画像などではなかったことが明らかになってくる。

①李長之　松枝茂夫・和田武司訳『陶淵明』筑摩書房一六五～一六六ページ参照。

②一海知義『前掲論文』一九一～一九二ページ参照。

③李長之　松枝茂夫・和田武司訳『前掲書』一六九ページ。

六

以上、述べてきたところから明らかなことは、「五柳先生伝」は、淵明の実録(生活そのものの記録)ではなく、彼の理想とする生活、かくありたいとする願望を描いたものであるということである。彼には、伝記を書いた作品もあり、伝記の備えるべき条件が如何なるものであるかは知悉しているわけだから、彼が自己の実録を残そうと思えば、「五柳先生伝」とは違った形で、詳細な記録を試みたはずである。しかし、彼はそうはしていない。それは「五柳先生伝」において、彼が記録しようとしたものが、いつわりない現実の自画像ではなくて、理想とか希望する人間像を描写することに重点があったからである。「五柳先生伝」が、明るくのびやかな面だけを描いているのもそこに理由があろう。

しかし、この作品が、長く実録的自伝とみなされてきたのも、理由の無いことではない。伝統的な淵明像が、この短篇の中に形象化された淵明自身の「五柳先生」像をそのまま継承してきたし、多くの場合には「五柳先生」の

イメージによって、淵明の他の作品をも見てきたという側面があることは注意してよいであろう。

この作品が自伝的形式をとりながら、自伝の備えるべき、人物の出自はもちろんその姓や名、それに経歴等について何も語っていないということも、淵明がこれを自己の実録的自伝として残そうとしたのではないことを物語っている。この作品が、多くの点で、今日我々が描く陶淵明の人となりと重なり合う部分があるということで、淵明の現実を写したものであるということにこだわり続けるならば、我々はやはり一面的な陶淵明像にとらわれ続けることになるだろう。如何なる作品といえども作家の現実に立脚し、その生活の実相を反映しないものはあり得ないし、作品にしてその作家を語っていないものもない。しかし、我々はそのような作品を自伝とは呼ばない。実録と言い、自伝と呼ぶのには、自ら備えていなければならない条件があるであろう。

「先生は何許の人なるかを知らず、亦た其の姓字を詳かにせず。」という冒頭の書き出しには、物語り的な架空の世界を想起せしめるものがある。そこには、淵明自身が自己の現実に立脚しながらも、自己を現実のわく組みの中から切り離し、あらゆる現実の束縛から自由になったところで、想像の世界で自己の理想の生き方を物語ろうとする姿勢が見られるし、作品の内容はそれをうらづけている。それはフィクションへの強い関心のあらわれであり、虚構への意識的な傾斜であろう。書き出しの言葉にはそれが強くあらわれている。

「五柳先生伝」における虚構の組み立て方の特色は、一つには自己の理想を描いたこと。その背景には李長之や一海知義らが言うように、現実の政治に対する消極的抗議が込められていること。二つには、精神主義的であること。一人の人間の伝という形をとりながら、その社会的な活動の側面は薄弱で、内面的なことがらに記述がしぼられている。これは理想を描いたこと関連しているのだろう。第三に、理想を太古伝説時代に求めていることがあげられる。